

20020289

厚生科学研究研究費補助金
障害保健福祉総合研究事業

精神保健の健康教育に関する研究
(課題番号 H14-障害-007)

平成 14 年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 渡辺 義文
(山口大学医学部高次神経科学講座)

平成 15(2003)年 3 月

目 次

I. 総括研究報告書	1
精神保健の健康教育に関する研究 渡辺 義文	
II. 分担研究報告書	
1. 中・高校生を対象とした精神障害に対する 意識調査 山脇 成人	8
2. 精神医療・福祉施設における障害者との 交流体験活動実態調査 堀口 淳	28
3. 精神障害者との交流体験に関する先進施設 の視察・調査 久保 武	39

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）
総括研究報告書

精神保健の健康教育に関する研究

主任研究者 渡辺 義文 山口大学医学部高次神経科学（神経精神医学）講座教授

研究要旨 中・高校生を対象とした精神保健の健康教育に関する実践的研究の予備的研究として、1) 青少年の精神障害に対する意識調査、2) 精神医療・福祉施設における障害者との交流体験活動実態調査、3) 交流体験活動における問題点、成果等に関する聞き取り調査を行った。中・高校生では精神障害に対する基本的知識が極めて乏しく、歪んだイメージ、偏見もまだ未熟なものであり、早期の啓蒙・教育の重要性が示唆された。障害者との交流体験活動の成果は著しく、「普通の人と変わらない」と素直に障害者を対等の人間として受け入れていた。交流体験学習については、精神障害に関する事前教育に必要性が強く指摘された。以上の結果から、平成15年度に実施予定の精神保健教育プロジェクトの研究内容を展望した。

【分担研究者】

久保 武

山口県精神保健福祉センター所長

山脇 成人

広島大学医学部精神神経医学講座教授

堀口 淳

島根医科大学精神医学講座教授

イゼーションの理念を青少年の心の中に育成することは、青少年の人格形成のうえで必須のことと思われる。

本研究では、大人社会の影響を受けて弱者・障害者に対する差別・偏見意識が形成される可能性が高いと思われる中・高校生に対して、ノーマライゼーションの理念を具現化させ、健全な心の成長を促すことを目的として、精神保健教育の一環として心の成長とストレス、ストレスの引き起こす心身の障害、特に精神障害に対する正しい理解を深める具体的教育方法を検討する。

A. 研究目的

青少年期は人格形成において重要な精神的発達課題が多く、この時期に健全な心の成長を育む精神保健教育は極めて重要な意義を有しているものと思われる。弱者・障害者を同格な存在として認め、その人格・人権を尊重し、ともに協調して生きていくことを理想とするノーマラ

B. 研究方法

本研究は3年間のプロジェクトであり、

平成 14 年度はその初年度にあたる。本研究で目指す精神保健教育は中・高校生を対象とした学校現場での心の成長、ストレス、精神障害に関する講義、ならびに精神障害者との交流体験学習によるものである。本年度は、講義ならびに障害者との交流体験学習内容を検討していく予備研究として、中・高校生の意識調査、精神医療・福祉施設における障害者との交流体験活動の実態調査を行った。

1)中・高校生を対象とした精神障害に対する意識調査

山口、広島、島根 3 県の中・高校生を対象として行った。精神障害に対する意識調査は差別意識を助長する危険性があるとのことで、学校側の理解・協力を得ることができず、学校を通しての意識調査は行えなかった。そのため、研究者、研究協力者の知り合い等に依頼して、好意による協力のもと 100 名と小規模の意識調査のみが行えた。

アンケートは無記名で、「精神障害」、「精神病院」、「統合失調症(精神分裂病)」、「躁うつ病」、「アルコール依存症」の 5 つの言葉に対して浮かんでくるイメージを自由に記載する形式で行った。

2)精神医療・福祉施設における障害者との交流体験活動実態調査

山口、広島、島根 3 県内の精神科病院、保健所、社会復帰施設全てを対象に、一般市民や学生などと障害者との交流活動の実態について聞き取り調査を行った。その中で特に学生を対象とした交流活動を活発に行っている先進施設を 7ヶ所選り、交流活動の具体的内容、問題点、成果などについて詳しく聞き取り調査を行

った。

(倫理面への配慮)

意識調査については自由意志による参加を原則とし、強制しないよう配慮した。また、全て無記名で行い個人が同定される危険性がないように配慮した。障害者との交流活動実態調査については、交流活動に参加する個人までの調査は行っていない。

C. 研究結果

1)中・高校生を対象とした精神障害に対する意識調査

全体に「わからない」との回答が多く、さらに精神障害が知的問題、人格の問題のようにとらえている場合もあり、基本的な知識が極めて乏しいことが明らかとなった。特に「精神障害」、「統合失調症(精神分裂病)」についてその傾向が強かった。「精神障害」、「統合失調症(精神分裂病)」、「精神病院」については総じて「異様・不気味」、「犯罪」という反社会的イメージが強い傾向であった。一方、躁うつ病については具体的にイメージしやすいようで、身近なものと感じてはいるが、「引きこもる」「自殺」「暗い」とのイメージが強かった。しかし、精神障害、統合失調症とは異なり反社会的イメージは軽かった。アルコール依存症も具体的にイメージしやすく、「酒がやめられない」「酒の飲み過ぎ」と直截なイメージ加え「暴力」「落伍者」との反社会的イメージがみられた。

全体として意識は世間一般の表層的・反社会的イメージのみで、それもまだ未熟なものであり、基本的知識は極めて乏

しい実態が明らかとなった。

2)精神医療・福祉施設における障害者との交流体験活動実態調査

山口、広島、島根3県での精神科病院、社会復帰施設、保健所等における、当事者と一般市民、学生との交流活動や啓蒙活動の実態調査を行ったところ、病院、施設、保健所それぞれに異なる活動の特色がみられた。

保健所では講演会、バザーなどの大規模な企画による一般市民を対象とした普及啓蒙活動が、やや均質ではあるが、盛んに行われていた。それらの活動では当事者との交流は希薄にならざるを得ない限界がみられた。一方精神科病院、社会復帰施設では、小規模ながら一般市民への施設の開放、当事者との交流活動が多くの施設で行われていた。しかし、活動の主流はバザーなどの催し物への一般市民の参加、地域奉仕活動への施設側（当事者等）の参加であり、当事者との交流を主目的とした活動は極めて少なく、病院見学程度のものが多かった。

当事者との交流活動自体は全体的に少なく、その対象も一般市民の場合が圧倒的で、学生を対象とした交流活動は極めて少数の施設で行われているにすぎなかった。内容は学校側の体験学習（福祉教育授業、職場体験等）として受け入れているところが多く、見学的要素が強く、当事者との触れあいを通して精神疾患、精神障害者への理解を深めるという姿勢は弱いように思われた。実際、交流活動プログラムの中に、精神疾患に関する正しい知識を教育するプログラムはほとんど含まれていなかった。

3)障害者との交流体験活動に関する先進施設の視察・調査

精神科病院2ヶ所、共同作業所3ヶ所、通所授産施設1ヶ所、入所授産施設1ヶ所について、中・高校生と障害者との交流活動の活動内容、問題点とその対策、成果等について調査を行った。

精神科病院での交流活動は社会復帰施設の活動に比べ、病院主催のイベント等への参加や病院見学という消極的なものであり、障害者との深い交流の実践は乏しかった。一方、社会復帰施設においては障害者との共同作業や懇談が行われており、かなり親密な交流がなされていた。

交流活動における問題点として指摘された主なものは1)障害者が精神的に傷つく危険性、2)参加学生が違和感、マイナスイメージを持つ危険性の2つであった。しかし、交流活動の結果、参加した学生の多くは「普通の人と変わらない」という印象を受けたとのことで、職員の評価は概して高いものであった。しかし、2)の障害者・施設に対する違和感、マイナスイメージの危険性についての配慮、対策の重要性も指摘され、その具体策として殆どの施設で事前教育がなされていた。事前教育の内容としては、施設の概要説明、守秘義務に関する説明が多く、精神障害に関するプログラムはあまり実践されていなかった。幸い中学生では精神障害に対する偏見があまり強くなく、すんなり障害者との交流に入り込め、「普通の人と変わらない」との印象を受けていたことを考えると、事前教育で精神障害についてあまりに病気としての説明を強調することはかえって偏見を助長する危険

性があることも指摘された。もう一つの問題点である 1)障害者が精神的に傷つく危険性については、障害者の交流活動への参加を希望者のみとすることが提案された。

D. 考察

本年度の研究・調査は、来年度(平成15年度)に予定している中・高校生を対象とした「心の成長とストレス、ストレスの引き起こす心身の障害、特に精神障害に対する正しい理解を深める」ための健康教育(授業ならびに当事者との交流体験学習)に関する予備的なものとして行った。具体的獲得目標として設定したのは、1)青少年の精神障害に対する意識・イメージの把握、2)医療施設、社会復帰施設等の福祉施設、保健所等における当事者と一般市民、青少年との交流活動の実態の把握、3)交流活動における配慮すべき問題点、課題、成果・意義の把握であった。

本年度の研究・調査の成果の考察ならびに、その成果をもとにした来年度の中・高校生に対する心の健康教育プロジェクトに関する展望を述べてみたい。まず、精神障害に対する意識・イメージ調査から明らかとなったことは、精神障害に対する中・高校生の基本的知識は極めて乏しく、それが幸いしてか、精神障害に対する意識も世間一般的な表層的・反社会的イメージのみで、それもまだ未熟なもので、大人の偏見ほどは凝り固まったものではないことであった。この事実は教育・啓蒙の介入する余地が十分にあるだけではなく、早期の教育・啓蒙がい

かに重要であるかを示唆している。換言すれば、本研究で取り組む学校現場・社会での心の健康教育の意義が支持されたと考えられる。本調査を基に、来年度プロジェクトで学生の意識変化の評価に用いる意識評価表のたたき台を作成したが、今後さらに検討を加えて充実させていきたい。

社会における精神障害に対する啓蒙活動の実態を調査したが、講演会、施設主催のイベントへの住民の参加、地域奉仕活動への参加等、施設の開放化へ向けての努力はみられるが、もう一つ進んだ障害者と住民との密接な交流活動は極めて乏しいのが現状であった。それも学生を対象とした交流活動はさらに少なかったが、意義・成果については高い評価が与えられていた。交流活動を通して参加した学生の多くは、障害者に対し、「普通の人と変わらない」との印象を持つようになり、障害者に対する偏見の除去への効果は多大であった。上述したように、学生の精神障害に関する基礎知識は極めて乏しいことを考えると、交流体験学習と組み合わせ、事前教育として精神障害に関する教育を行うことは極めて有意義と思われる。この点に関しては、来年度プロジェクトで十分な検討を加える予定である。

今回の施設における交流活動の聞き取り調査で指摘された主な問題点は、1)参加学生が障害者に対しての違和感、マイナスイメージを抱く危険性、2)障害者が精神的に傷付く危険性の2点であった。これら問題点に対する対応策として重要性が指摘されたのが、やはり事前教

育であった。しかし、あまりに精神障害の病気の側面を強調しすぎると、かえって偏見を助長する危険があり、その内容については慎重に検討すべきと考える。資料にあるように、文部科学省も基本的には本プロジェクトの意義を認め、協力姿勢を明らかにしているが、教育内容については精神障害に偏らず、心の成長・健康、ストレスと心、その障害としての精神障害というバランスのとれた内容にすべく配慮することが必要と思われる。以上から、来年度のプロジェクトにおける教育内容（授業内容）については、①心の成長、発達課題、②成長段階のストレスとその対応、③ストレスによる心の病気、④ノーマライゼーションの概念、という組立を考えている。

交流体験学習のもう一つの問題である2) 障害者が精神的に傷つく危険性に対しては、交流体験学習の場を施設とはせず、参加を納得した障害者の方々の方に学校現場に出向いていただき、シンポジウム形式で学生との対話を演出したいと考えている。このことについては、やはり文部科学省が指摘するように、まず障害者の理解・納得、精神状態の安定に配慮するとともに、教育関係者や父兄の理解・納得を得るよう配慮したい。

調査段階で指摘されたことであり、当初より我々も考えていたことであるが、学生に対する心の健康教育を実践する場合、教える立場の者が精神障害に対して正しい知識と理解を持っていることは必要不可欠なことと思われる。そのため、本プロジェクトでは学生のみならず教員に対する心の健康教育を企画していき

いと考えている。対象として考えているのは日常引きこもりなどの事例に多く接する立場にある養護教員である。教育内容としては、講演、学生対象の障害者との交流体験学習、さらに可能であれば施設における障害者との交流体験学習、さらに可能であれば施設における障害者との交流体験学習を考えている。

E. 結論

中・高校生の精神障害に対する偏見意識はまだ未成熟であり、その基本的知識も極めて乏しい実態が明らかとなり、本プロジェクトで計画しているような精神保健教育の可能性ならびに重要性が確認された。まだ心の柔軟な中・高校生にとって障害者との触れ合いは、素直な障害者・人間観を育む重要な成長の場であることも本研究によって示唆された。また、障害者と触れ合う前に、正しい基礎知識を提供することの重要性も示唆されており、来年度のプロジェクトではこれら二つの教育的働きかけについて、内容を十分に吟味したうえで、実践に移し、その成果、問題点の解析を行い、中・高校生に対する精神保健の健康教育のあり方について提言を行う予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

1 基本姿勢

児童生徒の健やかな心の成長を促す一助として、学校教育において、精神と身体の関係や、欲求やストレスに対して適切に対処すること等、心の健康を保持するための教育は重要であり、厚生労働省の研究課題等に対して、必要な協力を行う。

2 研究実施に関する要望

- ① 学校において健康教育を推進するに当たっては、児童生徒の発達段階を踏まえることが重要である。

先日ご提示いただいた研究の概要では、統合失調症とアルコール依存症に関する意識調査の実施等について言及いただいていたが、前述のような観点からすると、例えば、心の健康の保持増進のため心と体の状態が密接に関連していること、あるいは、欲求やストレスについて知り、それらに適切に対処すること等についての効果的な指導方法について、研究いただくことも考えられるのではないか。
- ② 研究を進めるに当たっては、学校現場の理解と協力を得ながら進めていただくことが重要であり、その点については今後も引き続き御配慮いただければと考える。
- ③ 本調査研究のフィールドとして精神障害関係の施設に児童生徒が行くこと、又は、講師として精神障害者（あるいはその経験者）を想定しているのであれば、回復期にある、又は自己管理のできる者と接することを基本とすべきであり、症状が重く、嚴重な治療を受けている者と会わせることは問題が大きい。このことに十分に配慮して、県及び市町村の教育委員会並びに保護者の理解を得ることが重要である。
- ④ 研究成果の生かし方については、生徒向けの副読本の作成が適切かどうかも含め、今後の研究の状況や学校の実態などを踏まえて引き続き検討する必要があると考える。

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

分担研究報告書

中・高校生を対象とした精神障害に対する意識調査

分担研究者 山脇 成人 広島大学医学部神経精神医学講座教授
研究協力者 高見 清 広島大学医学部神経精神医学講座
研究協力者 黒崎 充男 広島大学医学部神経精神医学講座
研究協力者 安常 香 広島県立総合精神保健福祉センター 課長

研究要旨 中・高校生 100 名に対して精神障害および精神障害者についての意識調査を行った。精神障害者・精神病院は「怖い・危険」「異質」で近寄りたくないというイメージであり、統合失調症（精神分裂病）は何かわからないが「怖い」イメージ、躁うつ病は比較的身近な病気で「ひきこもり」「自殺」の危険性があり「暗い」病気というイメージであった。アルコール依存症はイメージしやすい病気ではあるものの心の病気というイメージよりも「暴力」「体の病気」をイメージするものが多かった。

A.研究目的

青少年期は人格形成において重要な精神的発達課題が多く、大人社会の影響を受けて弱者に対する差別・偏見意識が形成される危険性が高いと思われる。

本調査は精神障害者のノーマライゼーション理念を具現化させる精神保健教育の一環として精神保健に対する正しい理解を深める具体的教育方法を検討する上で、中・高校生が精神障害および精神障害者に対しどのような知識やイメージを持っているかを明らかにすることを目的として行った。

B.研究方法

対象はランダムに抽出した中・高校生 100 名である。

調査には、精神保健意識基礎調査表（資料 1）を用い、「精神障害者」「精神病院」「統合失調症（精神分裂病）」「躁うつ病」「アルコール依存症」の 5 つの語句について、自由記載方式で行った。

（倫理面への配慮）

対象者には研究の趣旨について十分な説明を行い、研究への協力の有無によって不利益が生じないこと・守秘義務を遵守することを伝えた上で同意を得た。また、調査後、基礎調査表にあげられた語句について個別に説明し、誤ったイメージや偏見を持たないように配慮した。

C. 研究結果

1. 精神障害者（資料2）

「わからない・空欄回答」のものが17名、「精神の障害」という語句からの直接的イメージを挙げたものが10名で、計27名は知識や具体的イメージを挙げる事ができなかった。

症状や病気の知識としての回答の中では、「叫ぶ」「変わった行動をする」といった「異常行動」をイメージとして挙げたものが10名と最も多く、次いで「知能の遅れ」9名、「精神的不安定」9名、「犯罪」7名、「薬物依存」6名、「言葉の遅れ」5名、「トラウマ」5名であった。イメージとしては、「怖い・危険」が12名と最も多く、ついで「自分たちとは違う人」といった「異質」な感じを挙げたものが8名であった。「大変そうだ」「寂しい

「やさしい」といった障害への理解を示すイメージを挙げたものも数名認められた。また、芸能人や小説・アニメのキャラクター、社会的事件をイメージとして挙げたものが数名認められた。

2. 精神病院（資料3）

「わからない・空欄回答」が15名、「精神障害者が行く所」という語句からの直接的イメージの回答が16名で計31名は具体的イメージを挙げる事ができなかった。

病院という語句から「治療の場」という回答が24名と多かったが、その一方で「隔離」12名、「閉鎖」7名、「拘束」5名、「収容」4名と特殊な収容施設をイメ

ージする回答も認められた。

また、「怖い」というイメージが11名と多く、「暗い」「自殺」「大変な場所」という否定的なイメージが目立った。社会的な事件や犯罪・精神鑑定などの反社会的なイメージを挙げるものも数名認められた。

3. 統合失調症（精神分裂病）（資料3）

「わからない・空欄回答」が58名、「精神が分裂」といった語句からの直接的なイメージを挙げたものが3名で計61名が具体的なイメージや知識を挙げる事ができなかった。

知識としては「多重人格」を挙げたものが20名と最も多く、次いで「トラウマ」「精神的不安定」「薬物乱用」を挙げたものが数名認められた。

イメージとしては、「怖い」が8名と最も多かったが、症状で苦勞している、大変そうだといった同情的イメージを挙げたものも数名認められた。

4. 躁うつ病（資料5）

「わからない・空欄回答」が44名と半数近くを占めていた。

「閉じこもり・ひきこもり」10名、「自殺」7名、「落ち込む」6名といった症状を挙げるものが多く、イメージとしては「暗い」が11名と最も多かった。「サラリーマン」「不登校」「誰でもなる」といった身近なものとしてのイメージを挙げたものも数名認められた。また、「怖い」は1名と他の語句に比較して少なかった。

5. アルコール依存症（資料6）

「わからない・空欄回答」が10名と質問項目中最も少なかった。

「酒をやめられない」26名「飲みすぎ」23名と飲酒行動をイメージする回答が多かったが、「暴力」14名、「肝臓病・体の病気・短命」7名と飲酒後の問題行動や影響をイメージとして挙げるものも目立った。また、「自業自得」「弱い人」といった個人の責任をイメージとして挙げるものも見られ、依存状態を心の病気としてイメージしている回答は認められなかった。

D. 考察

自由記載でアンケート調査を行ったが、「わからない・空欄回答」が精神分裂病で58名と最も多く、躁うつ病44名、精神障害者17名、精神病院15名、アルコール依存症10名の順となっていた。特に精神分裂病、躁うつ病は語句そのものを聞いたことがなく、中・高校生にとっては全く知らない病気であると思われた。

挙げられた語句の中には、「ひきこもり」「トラウマ」「ストレス」「ノイローゼ」「多重人格」など現代社会の中で問題視されTVなどでよく取り上げられている語句も多く、中・高校生の精神保健に関する知識はそういった媒体から得られていると思われた。また、映画や小説・アニメなど挙げるものもわずかながら認められ、精神疾患や精神障害者をイメージする上でマスメディアの影響が少なからずあると思われた。

精神障害者は「精神的に不安定」で「変わった行動をする人」であり「怖く・危険」であるイメージが多かった。自分たちとは違った異質な存在であり、近づきたくないものとしてイメージされているようだった。しかしながら、病名や病気としての症状は「知能の遅れ」や「言葉の遅れ」「薬物乱用」が挙げられ、精神医学的な中核的症狀は挙げられておらず知識の乏しさを伺わせた。

精神病院は「治療の場」であるというイメージと「収容の場」であるというイメージの両者が認められたが、「怖い」「暗い」場所といった近づきたくない否定的イメージで捉えられていた。「隔離」「閉鎖」「拘束」といった強制的なイメージが強く、誰もが通院できる場所としては捉えられていなかった。

統合失調症（精神分裂病）は「わからない・空欄回答」が5つの質問項目中最も多く、病気としての知識はほとんどないと思われた。精神が分裂という語句から人格の分裂をイメージしたためか「多重人格」という回答が多かったのは印象的であった。

犯罪をイメージしたものは3名と精神障害者の項目でイメージされた7名に比較して少なく、精神分裂病という語句そのものを知らないために逆に犯罪イメージと結びつきにくかったと思われた。しかし、「怖い」という回答は多く、全体として何かわからないが不気味なものというイメージであると思われた。

躁うつ病も統合失調症（精神分裂病）と並んで「わからない・空欄回答」が多かったが、症状として「落ち込む」「ひきこもり」「自殺」などが具体的に挙げられ、誰でもなる可能性のある身近な病気として捉えられている点が異なっていた。

アルコール依存症は他の精神疾患に比較して「わからない・空欄回答」が少なかった。また、極端に誤った理解が少なく、アルコール依存についての学習体験の効果が感じられた。全般的には「中年」「男性」の「酒が止められない」状態で「暴力」を振るい「体を壊す」病気というイメージであった。

E. 結論

中・高校生 100 名に対して精神障害および精神障害者についての意識調査を行った。

精神障害者・精神病院は「怖い・危険」「異質」で近寄りたくないというイメージであり、統合失調症（精神分裂病）は何かわからないが「怖い」イメージ、躁うつ病は比較的身近な病気で「ひきこもり」「自殺」の危険性があり「暗い」病気というイメージであった。アルコール依存症はイメージしやすい病気ではあるものの心の病気というイメージよりも「暴力」「体の病気」をイメージするものが多かった。

今回の調査では、自由記載方式で行ったため空欄回答も多く、語句そのものを知らないと思われる中・高校生には回答

しにくいアンケートとなった。その結果を踏まえ、より具体的に精神障害や精神障害者に対する知識やイメージを調査するために新たに調査票を作成した（資料 8）。次年度は新たな調査票を用いて、中・高校生における意識調査を継続する予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

資料2 「精神障害者」の意識調査結果

(名)

	わからない・空欄回答	17
	精神の障害	10
症状・病気	知的な遅れ	9
	身体障害	3
	言葉の遅れ	5
	生活障害	1
	アルツハイマー	1
	ノイローゼ	3
	多重人格	3
	薬物依存	6
	自閉症	1
	心の病	1
	リュウマチ	1
	精神的不安定	9
	幻覚	3
	妄想	1
	異常行動	10
	ストレス	1
	トラウマ	5
	遺伝	2
	自殺	3
	犯罪	7
マスメディア	社会的事件	1
	芸能人	2
	本・アニメ	2
イメージ	異質	8
	怖い・危険	12
	不気味	3
	暗い	2
	近づきたくない	2
	孤独・寂しい	3
	大変そう	5
	やさしい	2

資料3 「精神病院」の意識調査結果

(名)

わからない・空欄回答	15
精神障害者が行くところ	16
精神障害者の治療	24
収容	4
隔離	12
閉鎖	7
拘束	5
特殊な場所	3
自殺	3
精神鑑定	2
社会的事件	2
映画	1
白い	7
黄色い救急車	1
怖い	11
暗い	4
大変そう	5
静か	1

資料4 「統合失調症(精神分裂病)」の意識調査結果

(名)

わからない・空欄回答	58
精神が分裂	3
多重人格	20
精神不安定	2
独語	1
暴力	1
薬物乱用	2
自殺	1
伝染性	1
ストレス	1
トラウマ	5
リストカット	1
犯罪	3
怖い	8
近づきたくない	2
苦勞している	1
大変そう	2
映画	2
アニメ	1

資料5 「躁うつ病」の意識調査結果

(名)

わからない・空欄回答	44
落ち込む	6
悲しくなる	3
閉じこもる	10
ぼーっとしている	2
不登校	1
孤独	2
ぼけ	1
自殺	7
ノイローゼ	3
不眠	1
独語	1
殺人	1
伝染性	1
暗い	11
重い	2
怖い	1
内気	1
サラリーマン	1
誰でもなる	2
つらい	2

資料6 「アルコール依存症」の意識調査結果

(名)

わからない・空欄回答	10
酒・ビール	4
アル中	9
酒好き	5
酒をやめられない	26
飲みすぎ	23
酔っ払い	4
暴力	14
怖い	3
おじさん	7
手の震え	1
肝臓病・体を壊す・短命	7
自業自得	1
弱い人・負けた人	3
映画	2
アニメ	1

資料 7

精神保健意識基礎調査結果

	精神障害者	精神病院	統合失調症(精神分裂病)	躁うつ病	アルコール依存症
1	知能が少ない人	精神障害者が行くところ	わからない	わからない	アルコールがないと生きていけない人
2	精神的に何かいけない人・幻覚や幻聴などが見えたり聞こえたりする人	精神に異常のある人が行く所	精神的に何人も人がいる人	すごく内気になる人	アル中・手がふるえる
3	精神的にふつうの人とちがう人	精神障害者の人がふつうの人にもどるようなところ	わからん	わからん	お酒のみすぎの人
4	精神的に弱い人がなるもの??	精神障害者がかよるところ	わかりません	悲しくなったり、精神的にすごく弱い人	わかりません
5	産まれる前に何か親のおなかの中にあつた人	精神障害者の人たちがいる病院	わかりません	わかりません	お酒が好きな人
6	精神的に一般の人とは少し異なっている人	精神的な問題のある人が行くところ	わかりません	悲しくなってしまう病気	アルコールの飲みすぎ
7	わからない	精神の病気	分からない	分からない	お酒を飲んだ
8	精神が不安定	精神不安定な人が行く病院	わからない	わからない	お酒を飲みすぎて残ること
9	わからない	わからない	わからない	くらいイメージ	お酒のみすぎた人
10	なおすのに大変そう	くらそう。かんごふさんとか大変そう	自分でも苦労してそうだし、まわりもくろうしてそう。他の人から理かいされがたそう	心のいちばんおもい病気になるかんじ	酒ののみすぎ。暴力そう
11	ふつうの学校に行けない	分からない	分からない	家にとじこもる	暴れる
12	精神にいじょうがある障害者の人のこと	せいしんがおかしい人がかよう病院	わかりません	わかりません	お酒やワインをのみすぎるとでるしょうじょう
13	精神がおかしくなる	精神をなおす病院	精神がわかる	わかりません	アルコールがからだ中にのこる
14	トラウマ	わからない	わからない	わからない	わからない
15	わからん	わからん	人にうつる	とじこもる	よくよっぱらう人